

在インドネシア領事事務所から

東インドネシアの 玄関口として 発展するマカッサル



在マカッサル領事事務所長
安江 勝信

●かつては東南アジア島嶼地域で最大の国際貿易・港湾都市

去る4月下旬に在マカッサル領事事務所長として着任しました。以前にマカッサルを訪問したのは1990年代後半です。当時と比較すると市街地の拡がりや高いビルなど町の様子は隔世の感があります。マカッサルは古くから港町として交通の要衝でしたが、現在、人口は150万を超え、大都市として発展しつつあります。一方で急速な都市化に伴う交通渋滞や環境等の問題が深刻になりつつあります。

かつてこの地でゴア王国が盛んであった17世紀半ばの頃、マカッサルは東南アジア島嶼地域で最大の国際貿易・港湾都市として栄えていました。しかし、香料貿易の権益をめぐる進出してきたオランダとの戦闘により王国は衰退し、その後オランダ植民地時代には町としての発展は停滞していたようです。

今回マカッサルに赴任して、降り注ぐ力強い太陽の光、まばゆい木々の緑、どこまでも続く海の青さに改めて強い異国情緒を感じています。古の人々が豊かな大地から果てしない雄大な海に進出したのも、この大地の気風がそうさせたような気がします。マカッサル海峡をゆっくりと行き交う貨物船を見ていると、古の時代、東インドネシア地域をはじめ、ジャワ島、さらにはシンガポールや南部タイまで伝統的な木造帆船「ピニシ船」を駆使して大海原を航海した往時の人々が偲ばれます。



ポマント・マカッサル市長を表敬訪問

2017年、国連教育科学文化機関（ユネスコ）はこの「ピニシ船」とその造船工法を「人類の無形文化遺産」に登録しました。世代を超えて伝統的な造船技術が現代まで受け継がれていることは驚くべきことです。マカッサル市のシンボルマークには、この「ピニシ船」とともに、「一度帆を上げたなら、岸に戻るまい」との標語が添えられています。一度航海に出たなら途中で引き返さない、前進あるのみ、というブギス・マカッサルの人たちの心意気が表現されているような気がします。

●歴史的な日本との関わり

在マカッサル領事事務所が管轄する地域は、スラウェシ島全域からパプア州までを含む東インドネシア地域の10州に及ぶ広大な地域です。その中でも南スラウェシ州と北スラウェシ州に在留邦人の方が比較的多く居住していますが、このほかにもマルク、パプア地域等にも邦人の方が点々と居住し

ています。

日本は第二次大戦前からインドネシア独立戦争期にかけて、インドネシア各地の歴史に深くかかわりを持ってきましたが、南スラウェシ州のマカッサルや北スラウェシ州のマナドやビトゥン、パプア地域のマノクワリやピアク等において日本人慰霊碑など多くの足跡が見られます。

去る6月26日、マカッサルにある旧日本軍人の慰霊碑を春季墓参で訪問しました。同慰霊碑は、第二次大戦後に戦勝国によってマカッサルで処刑された34名の旧日本軍人を慰霊するものですが、34名の中にはインドネシア独立戦争に参加して逮捕された3名も含まれているとのこと。同慰霊碑は、マハカウベ氏というインドネシアの方の御自宅の前庭に建立されて管理されているものですが、このような方の御厚情によって両国の関係は支えられていることも忘れてはならないと思います。

最近の日本との関係で特筆すべきこととして、日本の大学で修士号、博士号等を取得した元日本留学生が、南スラウェシ州で約250名にも達しています。その多くが、当地国立ハサヌディン大学の教員として、また州政府の要職について活躍しています。このことは日本にとって大きな財産であり、両国関係の橋渡しとなってくれる貴重な存在を今後も大切にしていきたいと思っています。

●東インドネシアは天然資源の宝庫

マカッサルは東インドネシア地域への玄関口でもあり、東インドネシア地域の開発の重要な拠点と言えます。この地域はインフラ等の開発が遅れている一方で、鉱物資源や農業、水産資源など豊かな天然資源があり、インドネシアの今後の発展のカギとなる地域です。南スラウェシ州は農業や水産業が盛んな地域で、米の一大生産地でもあり、山岳地帯ではチョコレートの原料となるカカオやコーヒー豆のトラジャも有名です。中部スラウェシ州や南東スラウェシ州では、金、銅、ニッケル等の鉱物資源が豊富で、特に2014年以降、鉱石等の原石での輸出が禁止されたため、ニッケル精錬所プロジェクトが中国等の企業との合併で大々的に進められています。

東インドネシア地域への日本の投資や企業の進出は、エネルギー分野や農業・水産業の分野です。いくつか見られますが、今後も大きな潜在性を有していると思われます。これらの分野で二国間の協力が進展していくことを期待しています。

●邦人の安全と新型コロナウイルスとの戦い

マカッサルでは、去る3月に市内のキリスト教大聖堂で過激派による自爆テロ事件が発生しました。実行犯2名が死亡し、教会に集まっていた十数人が負傷しました。この事件もあり、着任後、マカッサル市警察署長を表敬し、在留邦人の安全と保護をお願いしてきました。同警察署長は、治安の確保はもちろんのこと、新型コロナウイルス感染拡大への対応についても、マカッサル市長と協力して取り組んでいる旨説明してくれました。

当地でも新型コロナの変異種による感染拡大の脅威は続いていて、今後も厳しい状況が予想されます。在留邦人の皆様にお役に立てるよう、関連する情報提供等に努力していきたいと考えています。

安江 勝信（やすえ・かつのぶ）

愛知県出身。1982年外務省入省。ジャカルタ、スラバヤ、メダン等で在外勤務。在インドネシア日本国大使館参事官、外務省国際情報統括官組織上席専門官などを経て2021年4月から現職。